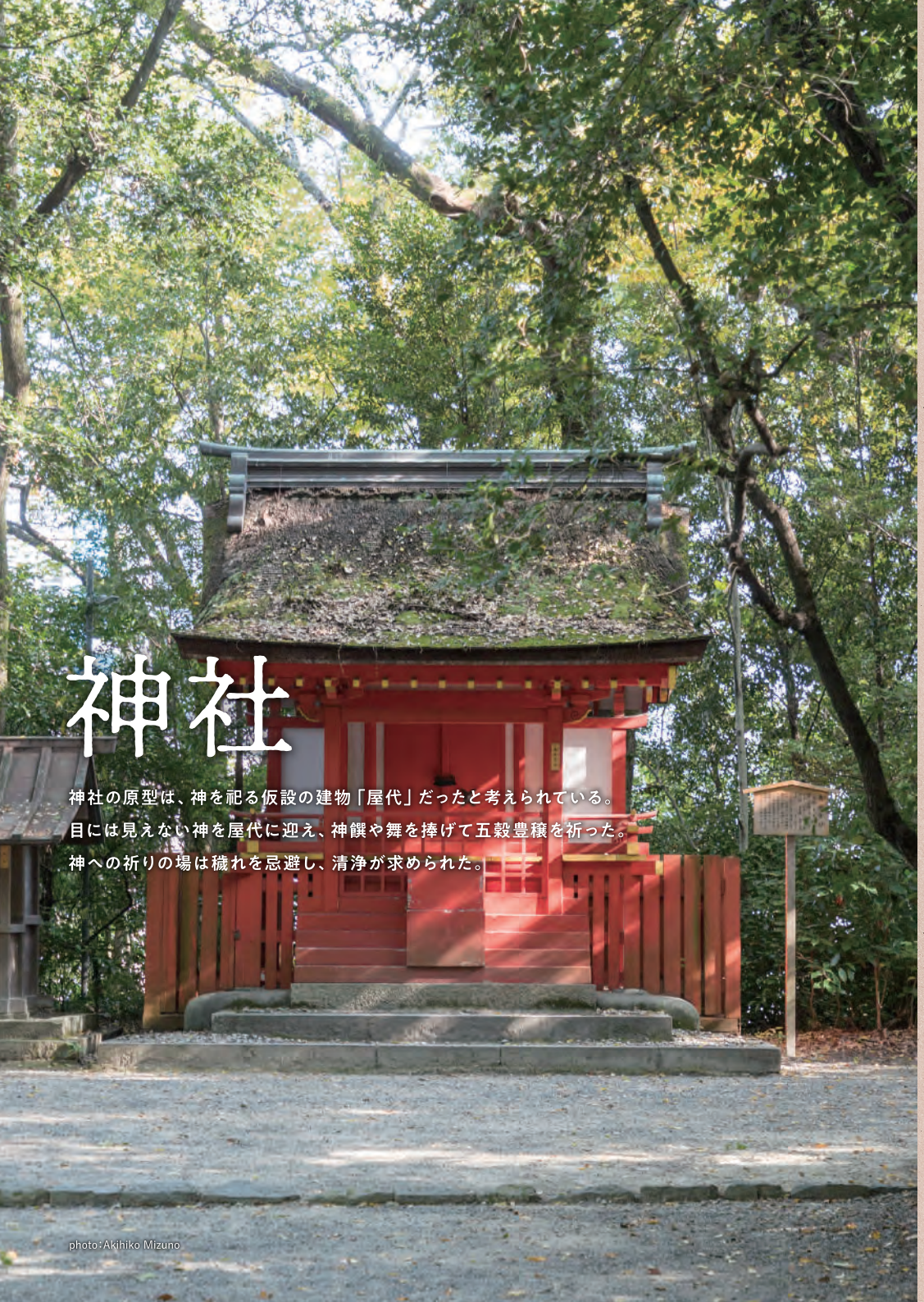


神社

神社の原型は、神を祀る仮設の建物「屋代」だったと考えられている。
目には見えない神を屋代に迎え、神饌や舞を捧げて五穀豊穣を祈った。
神への祈りの場は穢れを忌避し、清浄が求められた。

photo:Akihiko Mizuno

column

建物を楽しむために

【建物を見るコツ】

古い建物は見るだけで楽しいものです。旅先や、いつもの街並みの中で良い建物を見つけた時は、まるで大切なたからものを手に入れたような気分になります。

建物を楽しむ手段はひとそれぞれですが、あえてガイドラインを紹介するなら、まずは建物の周りの状況を眺めてみてください。なぜそこにその建物がたっているのかを、道路や街並みをヒントに探ってみましょう。

それから、建物をじっと見つめて、建物に漂っている雰囲気をじっくり感じてみましょう。もし上手くいかない時は、ディテール(細部)を目で追いかけてみてください。なんとなく感じていた雰囲気は、色味が理由かもしれませんし、細部に施された装飾が原因かもしれません。

雰囲気を味わえるようになったら、建物のたどってきた物語へ想像の翼を広げてみましょう。年代や様式、デザイン、構造の種類などの知識があれば、より鮮明に想像することができます。所有者やガイドボランティアから話を聞くことも役に立つでしょう。

建物を理解するうちに、その建物を大好きになっていれば、あなたはもう立派な建築マニアです。

【建物を彩る者たち】

神社や寺院、教会には、不思議な装飾が建物の至るところに施されています。例えば、神社の屋根から突き出ている千木や、棟の上の堅魚木などは、太古の王たちの住まいを象徴するシンボルだったと言われています。

また、寺院の柱の上部に獅子や獏の彫刻がついているのは、邪を追い払い争いを避ける意味が込められています。一方、教会のステンドグラスは、文字の読めない信者たちに、ヴィジュアルで聖書の物語を伝える目的がありました。

これらはいずれも、本来は建物の構造の発展と密接に関わっていました。建物を彩る装飾は、そんな建築の変遷をより深く理解する入り口にもなってくれます。

【建築マニアの嗜み】

建物はそれを使用し管理する所有者がいて、はじめて姿を保つことができます。見学する際には建物へのいたわりの心を持って、大切に扱いましょう。また、中には見学のできない建物もあります。そういった場合は無理をしないこと。じっくり機会を待てばいつか見ることができる、その日を信じて無茶をしないことも、建築マニアの嗜みなのです。

photo：Hitoshi Kumamoto

外観。手前が拝殿で、その後ろの祭文殿から横に廻廊が伸びている

真清田神社

伝統の形式と近代建築が融合した、尾張造の完成形

まちのはじまりの神社

歴史ある社寺の名称は、そのままままちの名前になっていることがあります。織維のまち一宮市の「いちのみや」とは、尾張国一之宮の真清田神社のことを指します。

中心街のアーケードの最深部に、まちの喧騒から隔てるような立派な楼門がたち、広々とした境内の奥に真清田神社の社殿があります。また、後ろに控える森の存在が、厳かな印象をより強めています。

よく見ると社殿はいくつかの建物が集まっていることに気がつくでしょう。建物同士は

拝殿からの眺め。わずかに見える奥の室礼が神秘的

緑青色の銅板屋根で繋がり、まるで一つの建物のように見えます。この複雑で一体化された社殿のかたちが、真清田神社の特徴です。

尾張国の一之宮

真清田神社の創建は古代と伝わり、かつては木曽川近くにあったといわれています。また、この辺りを治めていた尾張氏の祖神天火明命を祀り、中世に編まれた『延喜式』の神名帳にもその名が記載されています。

渡殿。厳かな室礼が美しい

一方、門前町から発展した一宮は、近世から近代にかけて繊維産業で繁栄し、神社も興隆しましたが、昭和20年の空襲で社殿を含む境内のほとんどを消失しました。

完成された尾張造

日本各地の神社には独自性があり、社殿にもそれが現れています。尾張地方では「尾張造」と呼ばれる、社殿を縦一列に配置する独特の形式があり、真清田神社もその一翼を担っていました。

戦災にあった真清田神社は、昭和22年の復興計画で元内務省神社局の角南隆と森恒保に協力を要請します。二人は焼失前の社殿の位置や大きさ、形式を保ちつつ、機能に合わせて新しい社殿を設計しました。

少し具体的に紹介しましょう。正面の一番手前にある拝殿は、元は巫女が舞踊を行う場所でしたが、手前に切妻屋根の向拝を伸ばすことで参拝者の空間を確保してあります。

奥に続く祭文殿は、かつては左右に伸びる廻廊に開かれた門のような位置づけでしたが、祭祀の変化に伴い大きな空間に変更されました。その奥には神主が祝詞を奏上する渡殿があり、最深部の本殿と連結されています。

ひときわ高く掲げられた本殿は、置千木や堅魚木、金の建具で装飾され、社殿全体のクライマックスに相応しい姿となっています。

角南は、元は別々に配置されていた建物を一体化させて、機能的な社殿を創り出しました。その一方で、それぞれの社殿は、床や天井の高さと形状、また儀礼の装飾などで空間の違いがきちんと示されています。

真清田神社の社殿は、機能に特化した近代建築と伝統文化、そして地域に根づく社殿形式とが見事に融合した、近代神社建築の名作です。

白砂に浮かぶ本殿

1957年（昭和32年）
木造平屋建て
［設計］角南隆・森恒保
一宮市真清田1-2-1
http://www.masumida.or.jp

幣殿の美しい室礼。御簾の向こうに本殿が鎮座する

知立神社

まちの歴史が織りなす、三河国の二宮

不思議な境内

知立神社の境内は、とても不思議な風景に囲まれています。

鳥居をくぐると、すぐ右手には本来は寺院にある多宝塔がたち、左手を見ると古びた学校のような建物があります。そして何より違和感を覚えるのが、境内のすぐ目の前に高架バイパスが通っていることです。

境内の奥を見ると、小池に架かった神橋の向こうに切妻屋根が重なる知立神社の社殿が、森に守られるように佇んでいます。

拝殿。切妻屋根が重なる重厚な表情

知立神社と歴史の変遷

知立神社の創建は古代に遡ると言われ、祭神は鵜草葺不合命を中心に四柱が祀られています。『延喜式』の神名帳にも名を連ね、三河の国の二宮として国司から祭祀を受けました。ちなみに知立を池鯉鮒と記したのは江戸時代からで、神橋のかかる池に鯉や鮒がいたことから使われだした言葉遊びに由来します。

また戦国時代になり、今川勢の兵火で社殿を消失し、現在地へ遷座しました。その時に、かつての境内地に隣接していた神宮寺の多宝塔が消失を免れ、こちらに移設されたと考えられています。

社殿についても興味深い変遷の歴史があります。知立神社は、江戸時代には本殿と幣殿、拝殿、神籬門で構成された社殿形式でしたが、明治期になって尾張造へと改築されています。また、拝殿は三河地震で倒壊したため、戦後に切妻屋根の重なる重厚な姿へと変えられました。

重要文化財の多宝塔

以前はそれぞれが独立した社殿でしたが、現在は渡り（廊下）で繋げられ、柱間には壁や窓が入れられています。その一方で、社殿ごとに室礼が変えられ、本殿に行くほど床を上げて、厳かな雰囲気が高められています。

特に目を引くのが本殿前の幣殿の室礼です。御簾が吊られ、黒く艶めく床には緑の置き畳を敷き、丸柱で構成された空間は、平安時代の寝殿造の美を彷彿とさせます。

養正館のこと

境内には他にも養正館という趣のある建物があります。元は明治用水の事務所でしたが、女学校などに転用された後に知立神社へ移築されました。

この建物は、明治23年に行われた陸海軍の合同演習のおり、同地を訪れた明治天皇の休憩所になりました。広い2階には白い布が床や天井に隙間なく張られて、明治天皇をお迎えしたと言います。

ところで、参道を貫く高架バイパスも、知立の高度成長期を支えた重要な産業道路です。そのため、例祭で引き回される山車も、市民たちが協力しあい、高架を迂回する形で柔軟に対応されてきました。

知立神社の不思議な風景は、そのひとつひとつがまちの歴史を物語る大切な生き証人なのです。

未だ文化財ではないが、興味深い歴史を持つ養正館

本殿／1831年、幣殿／大正期、
祭文殿／明治期、拝殿／昭和29年
棟梁／不明（祭文殿および渡りは竹内善助）
知立市西町神田12
https://chiryu-jinja.com

登録／ 2010年9月
登録基準／造形の規範となっているもの（本殿・幣殿及び拝殿 ）
国土の歴史的景観に寄与しているもの（手水舎・神庫・神楽殿）

Akumikanbesinmeisya

拝殿から境内を眺める。鳥居の向こうに路面電車が走る、不思議な風景

安久美神戸神明社

都市空間にぴったり収まった、鬼祭りの神明社

路面電車の走る風景

掃き清められた神社の境内は、どこか異世界の雰囲気が漂います。

豊橋市を通る国道1号線沿いには、豊橋市公会堂や豊橋ハリストス教会など歴史的な建物があり、豊橋公園の緑を背景に穏やかな風景が続きます。

その並びに間口いっぱいに鳥居が立ち、奥には敷地に誂えたようにぴったり収まった、安久美神戸神明社の端正な拝殿があります。

拝殿の外観。手前の八角は儀調場

変遷の歴史

安久美はかつて飽海と記され、蛇行する豊川の合流地をいいました。このあたりには古代の律令制で置かれた郡衙があり、豊川の渡し舟の往来で古くから人が集まる場所だったといいます。

９４０年、平将門の乱の平定を伊勢神宮に祈願した朱雀天皇が、飽海を神領として寄進し、それ以後天照皇大神を祀る神明社となりました。名称の神戸とは神領を意味します。

その頃の社地は豊橋公園内にあり、ここに吉田城を開いた今川氏をはじめ、多くの武将から崇敬されたといいます。明治18年、吉田城に歩兵十八聯隊が置かれることになり、社殿は現在地へと遷座されました。

棟持ち柱が美しい本殿

ぴったり収まった社殿

現在の社殿は昭和5年に整備されたもので、設計は内務省神社局の角南隆が担当しました。形式としては、伊勢神宮に習って神明造が採用されました。

特徴的なのは、拝殿とその奥の幣殿、両脇の楽舎・神饌場、そして最深部の本殿が一体化されていることです。これは角南が創作した形式で、機能的に祭祀などを執り行えるよう考案されました。

また、連結された内部では調度だけでなく天井高や床高などで空間の差異化が図られ、本殿を頂点として感じられるような構成になっています。

社殿の隠れた見どころは、本殿の棟持ち柱です。節のない美しい丸柱がすっくと伸び上がる姿はとても感動的です。

敷地にぴったり収まった社殿には、そんな伝統建築の美と近代建築的な発想で綿密に計画された美が潜んでいます。

奇祭、鬼祭り

安久美神戸神明社では、毎年2月になると奇祭として名高い鬼祭りが開催されています。赤鬼が天狗に退治される筋書きで、赤鬼のユーモラスなしぐさや、真っ白い痰切り飴を境内に撒き散らすクライマックスは圧巻です。

豊川流域には、古くから五穀豊穣を願う田楽が根付き、鬼祭りもこの流れを汲んで創作されたと考えられています。それら伝統文化は社地が変わっても大切に受け継がれ続けています。

境内から路面電車が走る姿を眺めていると、ふと自分が異世界にいるような錯覚を覚えることがあります。神社にはそんな現実とは違う時間が流れているのかもしれません。

赤鬼。鬼祭りは重要無形民俗文化財

１９３０年（昭和５年）
木造平屋建て
［設計］角南隆
豊橋市八町通3-17
https://onimatsuri.jimdofree.com

拝殿のようす。両脇に広がる翼廊は戦後再建時に角南隆が指導したもの

特集1

熱田神宮

尾張造から神明造へ

熱田神宮は年間約700万人の参拝者が訪れる、全国でも有数の神社です。創祀は1900年前に遡るといわれ、三種の神器草薙神剣を祀っています。近郊には、草薙神剣を日本武尊から預かった宮簀媛命のものとされる断夫山古墳もあり、太古の歴史を今に伝えています。

現在の熱田神宮の本宮は、伊勢神宮にならった神明造という形式の社殿ですが、以前は真清田神社などと同じく尾張造の社殿配置でした。その頃の姿は、境内の南新宮社の朱色の社殿や、こころの小径にある復元された土用殿に残っています。

社殿を一新したのは明治維新後のことで、

尾張造だった頃の形式を残す土用殿

伊勢神宮に次ぐ由緒ある社として、当時の宮司角田忠行によって推進されました。

神への祈りの場

鬱蒼とした森が厳かな雰囲気を漂わせる熱田神宮ですが、明治期までお寺や住宅が入り混じっていたといいます。角田宮司はこの状況を改善するため、境内の整備を進めました。広い表参道が本宮と別宮を繋ぐ姿は、このときに整えられたものです。整備計画には建築史家の伊東忠太や内務省神社局の角南隆が参加しました。

登録文化財の龍影閣は旧名古屋博物館の遺構

しかし一方で、戦前の熱田区は飛行機産業が集まっていた地域でもあり、太平洋戦争下で激しい空襲を受け、熱田神宮も本殿をはじめ多くの社殿が被災するなど甚大な被害を受けました。

復興されたのは昭和30年のこと。大規模な再建のために、全国から多くの寄付が集まったと言います。復興計画の神宮造営局長には角南隆が着任し、本宮拝殿の翼廊や境内への文化施設の建設を指導しました。

熱田神宮は四方を大通に囲われていますが、境内は静かで清らかな空気が流れています。その清廉な空気は、日々神に祈りを捧げ、清掃を絶やさず、祭祀に務める神職達によって保たれています。

合掌造の民家を移築した、登録文化財の又兵衛

登録／2000年12月
登録基準／国土の歴史的景観に寄与しているもの（蔵・宮門）
造形の規範となっているもの（社務所離れ）

Kyû Hadahatimangû Bunko

photo：Hitoshi Kumamoto

土蔵正面。ごく普通の土蔵が歴史的背景で貴重な文化遺産となる

旧羽田八幡宮文庫

歴史に埋もれた、江戸時代の図書館

類例のない文庫の遺構

豊橋駅西側の大通りを脇道に入り、住宅街の中にある羽田八幡宮の参道を進むと、賑やかな保育園の反対側に、古い小さな門があります。門の並びには黒い波板の貼られた土蔵がたっています。この土蔵が、江戸末期に建てられた類例のない文庫の遺構であることは、ほとんど知られていません。

参道脇にひっそり佇む門

羽田八幡宮と羽田野敬雄

羽田八幡宮は八幡大神（応神天皇）を祀る宇佐八幡宮の分霊社です。この境内に文庫を開設したのが神主の羽田野敬雄です。羽田野は幕末から明治初期にかけて活躍した国学者で、郷土史の編纂や産業の発展にも貢献しました。

1848年、羽田野は有志らと講を組織し、境内に文庫を開設します。書籍の蒐集には全国の学者や藩主などに要請し、ビラを刷って勧請を呼びかけたそうです。そして、開設から20年後には1万冊を超える本が集まりました。

この文庫が画期的だったのが、蒐集した本を現在の図書館のように、誰にでも貸し出したことです。神社に残された木製の箱には、一ヶ月を限りに返納することや、貸出は10冊までとすることなどが明記されています。

離れの和室。廊下を右に進むと土蔵がある

境内には松蔭学舎という閲覧所もあり、識者による公開講義も行われ、近代図書館を先取りした運営がなされていました。

離れと文庫

土蔵へは参道脇の門を進み、社務所の離れから入ります。離れは羽田野の邸宅の一部で、大正末頃に現在の場所へと移されました。

離れにはところどころに雅な意匠が残り、庭に面した明るい廊下に沿って10畳の和室が2つ並んでいます。廊下を折れ曲がると、少し離れて土蔵がたっています。

文庫があった頃の土蔵は敷地の中心に置かれ、すぐ側に防火のための池や水路が配されていました。また蔵前には木製の格子がはめられた前室が付いていました。

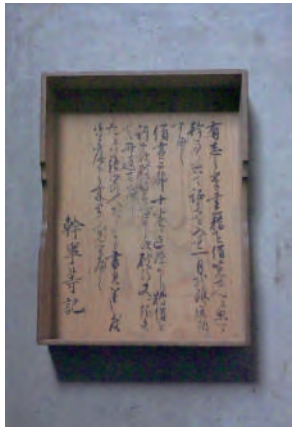
当時を描いた絵から、土蔵の前には紅葉があり、風情のある姿だったことが伺えます。

埋もれた文化遺産

文庫開設からおよそ60年後、羽田野ら関係者がこの世を去ると、文庫は閉鎖され、蔵書も売却されました。その後、散逸を惜しんだ地元の人々が買い戻し、それを豊橋市が買い取って、まちに図書館ができるきっかけとなりました。現在、蒐集された資料は市の指定文化財になっています。

その一方で、建物は譲渡され、神社の手から離れてしまいました。それから90年後、再び地元の有志の協力で、文庫跡地と建物が羽田八幡宮の所有となり、歴史的な価値が再評価されて、国の登録文化財になりました。

何気なくまちに溶け込んだ古びた建物がすごい歴史を抱えているかもしれない。旧羽田八幡宮文庫の存在は、そんなロマンを掻き立ててくれます。


但し書きの描かれた木製の箱

蔵・門／1850年　離れ／大正末期移築
土蔵造／木造／木造平屋建て
［設計］不明
豊橋市花田町字斉藤56-3